

「話す力」を伸ばすスキル・トレーニング・アラカルト

関西外国語大学教授 中嶋 洋一

「話す力」は、教科書の「音読」では身につかない。音読と話すことは別次元のことである。よって、教科書の本文暗記に時間をかけるよりも、少しでもここに紹介するような活動を「帯学習」として日常化させていくことが望ましい。できるようになった生徒たちは、昨日の自分よりも成長していることを実感できるので、意欲的に授業に取り組むようになる。

(1) Recast で「発話力」を高める

① 教師が授業中に Recast (再構成) する

授業中、生徒が言いよんだり、語法の間違いをしたりする場面に遭遇する。そんな時、教師はさりげなく、かつていねいに recast をしたい。

S: I like all music.

T: Oh, you like all kinds of music.

S: Yes. Especially I love Extreme.

T: Extreme? It's funk metal music, right?

このような地道な指導がくり返されて、「なるほど」が引き出され、より正しい英語が intake されていく。

また、教師はやり取りを通して、実際のコミュニケーションを生徒に示していることになるので、自然に生徒の「発話力」も高まっていく。

② 自分のことばで Recast する

生徒がする Recast (再構成) には、Retelling (再話) や Editing (要約) などがある。

リテリングとは、教科書の本文を暗記して再生することではない。自分のことばで、自分が理解したことを伝えるという意味である。よって、テキストを単純再生だけのリテリングでは発話のトレーニングとはならない。

「要約」も発話のトレーニングには欠かせない。自分が理解したことを、自分のことばでまとめさせる訓練は発話能力の土台となるからだ。

このような出力型のスキルは、自分の力だけでは向上しない。他と討論し、他の考えを知り、練り上げていくことで、伸びていくものである。

次期学習指導要領改訂の柱となる「アクティブ・ラーニング」でも、input for output の関係が大切になる。「出力」がゴールとして明確にされていなければ、「入力」に必要感は生まれてこない。

テストも同じ。パフォーマンス・テスト (speech, interaction, discussion, debate など) をどこで行うのか、どう評価するかが決まっていなければ、それに向けた指導はできない。

勘違いしてはならないのは、それらはゴールではなく、あくまでも「手段」だということ

とである。その手段を通して、「どんな力をつけるのか」が教師側の理念になればならない。

③ 「中間発表」をきっかけに Recast する

創作活動（話す活動，書く活動）を仕組み，グループで中間発表の場面を位置づける。これにより，仲間のよい取り組みに刺激を受け，仲間からのアドバイスや忠告をもとに Recast が始まる。

その時，一気に内容の質が高まっていく。実は，このような「振り返り」の時間・空間を位置づけていると，「画竜点睛」が当たり前になってくる。大切なのは「教えられる」レベルから，高次の「自ら学ぶ」レベルにまで高めていくことである。

「伝えたい」という内発的動機付けと，「伝わった」という達成感・成就感を感じていると，自己教育力やメタ認知力が高まっていく。

(2) 2つのマッピングで話せるようになる

① 「マインド・マッピング」で最初の構想を練る

SUNSHINE ENGLISH COURSE の屋台骨は，My Project（活用のタスク）と通常課がリンクされていること，Basic Dialog で，新しい言語材料を「文法シラバス」だけでなく，「場面シラバス」も加味して authentic に扱っていること，そして POWER-UP シリーズで複数の技能をリンクさせていることである。

出力の部分で一貫しているのは，マッピングを使うことである。なぜなら，それは出力（書くこと，話すこと）の構想づくりに有効だからである。

実は，マッピングには 2 種類ある。文章の構想を練る時に使うマインド・マッピングと，関連性を表すセマンティック・マッピングである。

マインド・マッピングでは，スピーチの原稿づくりなどで構想をつくり，ナンバリングをして，書く順番を決める。全体構想をつくり終わったら，制限時間を設けて，一気に英語で書いていく。わからない単語はとりあえずローマ字で書いておき，あとで調べるようにする。中 3 なら，3 分で 50 語程度は書けるようになる。

② 「セマンティック・マッピング」でインタビュー

セマンティック・マッピングもぜひ活用したい。セマンティック・マッピングは，大意の把握や要約をする時に役立つ。出力では，本文をリテリングする時やインタビューをする時に有効である。

リテリングでは，内容を時系列，または空間配列でマッピングしてみる。さらに，登場人物や事象の関係をマッピングで表していく。こうすると，頭の中に事象が visualize されていく。

インタビューをしながらマッピング（つながりを意識したメモ）をしていくと，質問がしやすい。質問が途切れた時には，会話の履歴が残っているので，バルーンが広がっていない箇所を探して，質問を再開させればよい。これにより，会話が続くようになる。

大切なことは「話すことがない」のではなく、「話が途切れない指導」を展開することである。

(3) 新出単語は、実際に自分で使うほうが定着しやすい

① 新出単語を英語の文脈で説明する

英単語は、*Collins COBUILD Primary Learner's Dictionary*, *Collins COBUILD Student's Dictionary* や *The Sesame Street Dictionary* などを使って、できるだけその定義を英語と絵や写真とともに導入したい。絵や写真を見ながら英語で説明してみる、またジェスチャーを使いながら、例のような定義を言えるようになるまで何度も練習をする。

(例) A hammer has a heavy piece of metal at the end of a (handle). You use hammer to hit (nails) into a wood or a (wall) or to (break) things into pieces.

段取りはこうだ。まず、金槌の絵(写真)を見せて、英文を見せる。()は最初、空欄になっている。何が入るかを考えさせ、教師が答えを言ったあと、絵を見てジェスチャーを使いながら、イメージできるまで言う練習をする。最後は、絵(写真)だけを残して、英語で(ジェスチャーと一緒に)言う。試みる。

このように、教師が新出単語を文脈で与え、英語で説明する訓練をしていけば、英語の語順で「情報を後ろに付け足していく」という感覚が身についていく。

② 新出単語を使って自分を語る

新出単語は「その単語を使った自己表現」で完結させる。たとえ、教科書の本文に出てくる単語を理解したとしても、日常生活や自分の関心事と乖離していれば、いつまで経っても使えるようにはならない。

よって、新出単語を調べたら、それを使って、My town, My family, Myselfなどのテーマで自己表現(3文程度の文脈)させることである。言いたい単語が出てきたら、辞書で調べさせる。調べた単語もノートに書き込む。英語の歌などに出てきた「使いたいフレーズ」も転写しておく。

こうすると、ノートが My dictionary になる。使ってみたい語彙やフレーズが増えていくと、自然に会話の中でも使うようになる。

授業の中で「深まり」をつくるのに必要なのは、このような「静の活動」である。

(4) 「演読」や「Retention, Reproduction」で話すイメージをつくる

① 「演読」で話すイメージをつくる

英語を話すイメージは、中学校の教科書本文「演読」(くわしくは開隆堂『英語教育』68-2号の pp.2-3 を参照)でつくられる。「音読」のポイントは、内容を理解したあとで、頭にイメージをつくりながら何度も読むということである。

日常活動にするには、教科書 3 冊を両面テープで合本し、「音読教材」にする。「音読の時間」を帯学習で設定し、自分のレベルにあった「音読教材」を選ぶ。音読をしていてイメージがわいてきたら、○をつけて次の単元に進めばよい。こうすると、英語が苦手な生

徒が救われるし、くり返すうちに、だんだんできるようになっていく。

② Listen and Repeat で話すイメージをつくる

リスニングでは shadowing (content shadowing, prosody shadowing) が有効だが、話せるようになるには、この retention (短い英文を聞いてオリジナルなまま再生する) の指導が欠かせない。短い英文は retention となり、かなり長い英文は reproduction となる。

retention は、教師 (ネイティブ) が natural speed で言う (読む) 英文を何も見ずに聞き、それをすぐにくり返す。聞いた文を再生するには、内容が理解できていないとできない。ただし、途中にカンマがある場合は、そこまでにする。reproduction は、自分で 5W1H の情報を中心にメモをとり、聞き終わったら再現 (reporting) をする。teacher talk や友だちの small talk が終わったら、ペアでジャンケンをし、勝った方が reproduction をするという活動はかなり有効である。

Read and Look-up (and Say) もそうだが、必要なのは、このように「集中」しながら聞く訓練をすること、「聞く活動 (読む)」から「話す活動 (咀嚼する)」へと連鎖させることである。これに慣れてくると、まとまった内容を自分の言葉で「要約」(summarizing) させるという活動へとシフトさせていくことができる。

③「紙上チャット」で話すイメージをつくる

話すほうの chat は即興ではなかなか続かない。そこでオススメなのは、紙上 chat。

紙 (A3 判か B4 判の紙を用意) の上で会話をすると、相手を書いている時に読めるので、言いたいことが準備できる。また、書きながら考えることもできるし、絵を描いて示すこともできる。

書いたことは「会話の履歴」として残るので、つなげやすく、心理的な負担も軽減される。何度もやって慣れてきたら、「書いたことの続きを話してみよう」という指示をする。車の「アイドリング➡出車 (出庫)」、飛行機の「滑走➡離陸」のイメージである。

(5) 即興で英語が話せるようになる下地をつくる

① 聞いたことをすぐに話す

即興で話す時に、大切なのは「直聴直解」の英語脳をつくることである。そこで必要になるのが、リスニングの能力を高めることだ。不可欠なのは、次の 3 点である。

(ア) 日本語にはない 4 つの子音 (l, th, f, v) の発音指導を徹底する。母音についてはあまり目くじらを立てず、[æ] [ə] [ʌ] 程度を意識させる。ネイティブに大げさに発音してもらい、その口をビデオでアップにして見せてやると、舌や歯の位置がわかりやすい。生徒には手鏡を持たせて真似させる。

(イ) 英語は 強弱アクセント のことばである。英単語は内容語 (content word) と機能語 (function word) に分けられる。実は、読む時は「内容語 (名詞, 形容詞, 副詞, 一般動詞, 指示代名詞, 疑問詞)」しか強く読まない。

機能語 (冠詞, 前置詞, 接続詞, 助動詞, be 動詞, 人称代名詞など) は軽く流すように

読む。だから、多くは単語同士の連結（リンキング）の対象となる。

では、内容語が続く時はどう読めばいいか。例えば「形容詞＋名詞」の時は両方とも強く読む。「名詞＋名詞」は、最初の名詞を強く読む。「動詞＋副詞」は副詞を強く読むことが多い。このようなルールも、教師は理解して指導したい。

(ウ) 英語らしく読むには、単語が連結する場所 (and I, check it out は、それぞれ「アンダィ」「チェケラウ」と読む)、音が脱落してしまう場所 (big game, black coffee は、最初のほうの文字を読まない) を意識させることも必要だ。

単語の発音、強弱アクセントや連結・脱落が正しくできなければ、話される英文が正しく聞き取れない。聞き取れなければ、理解できず、質問もできないということになる。

② 「話したこと」を書く

よく、ノートに書いてから話させるという指導を見かけるが、**prepared speech** では書いたことを暗記しようとするだけである。また、書いたものを思い出そうとしている限り、発話能力は高まらない。

効果があがるのは真逆の指導。CDなどで聞いたことを相手に自分のことばでレポート(英語)し、そのあと自分が話したことをノートに書くというプロセスである。

こうすると、理解したことを一気に書くことができるようになる。発話力を高めるには、この「まとまりをイメージさせる」という指導が鍵になる。性急にオリジナルなものを要求せず、下地づくり(英語の基礎体力づくり)をしていきたい。

③ 写真や絵を使って行うチャット

まずは、**Picture describing** を行う。教師が選んだ絵や写真(日本の伝統的なものなど)を英語で説明させる。生徒が自分で選んだタレントやペット、食べ物や住んでいる町の行事などの写真を英語で描写(説明)させることもできる。

さらに、それをもとにチャットをさせるという活動、終わったら質問をするという活動にも発展させられる。

授業の最初に、**teacher talk** をしたあと、それについての感想や考えを話し合わせる。また、教師が提示するニュースやネットの情報をもとに、チャット(雑談)をさせることもできる。

さらに三択(**My hobby, My favorite city, My favorite food** など)にして、ペアで1つ選び、チャットをするなど、バリエーションを複数用意しておきたい。

④ お題が書かれたカードを見て即興で話す

トランプ大のカードを20枚ぐらい用意する。それには「お題」が印刷してある。**My hobby, My favorite TV personality, My favorite musician, The city I'd like to live in the future, タイムマシンで行ってみたい時代と理由, ドラえもんのアイテムで欲しいものと理由, 透明人間になってやってみたいこと, などが書かれている。4人でジャンケンをして、勝った生徒から裏返しになっているカードを1枚選ぶ。書かれているお題で、即興で話をする。1**

分経ったら、周りの生徒がその内容について質問をする。

(6) 高速の和文英訳で話す力を鍛える

① 方言の本文訳（意訳）を同時通訳で英訳する

既習単元の本文を「方言」で訳したもの（意訳）を配布し、それを見ながら、同時通訳のように英訳させる。

方言は生活言語である。よって、イメージしやすい。主語がないことも多い。それを即興で主語を補いながら、英語で訳していくのである。このような「高速の和文英訳」が、英語の語順で考える日常的な訓練となる。慣れてきたら、小学校低学年の国語の教科書、日本昔話などの部分コピーを渡して、高速で英語に訳させる。終わったら、どう訳したかをペアで確認し、教師がポイントを教えるようにする。

以上、アラカルト形式で紹介をしてきたが、どれとどれを組み合わせるか、どう系統づけるかを決めるのは教師の責任である。

50 分のプログラムをデザインする必要性（かつ楽しみ）がわかってくると、教科書だけを使って先に進める授業、教師がずっと説明をする授業が、いかにもったいない（時間のロス）かがわかってくる。

5 分刻みの活動をどうテンポよく繋げていけるか。また、10 分の活動をどう途中でギアシフトできるか。それを考えてワクワクする英語教師。そう、今の授業が、生徒にとってよい授業か、そうでないかの判断基準は、「自分が生徒になって受けてみたい授業」になっているかどうかである。

まだまだ、ほかにもアイデアはあるが、とりあえずは継続してやってみることである。ことばである限り、続けなければならない。なお、もっとほかの方法も知りたいという方は、編集部にお問い合わせいただきたい。またの機会に、第 2 弾を用意していきたい。